

# 精神保健福祉士の養成課程における学生の 自己イメージと精神障害者イメージの変化 —実習との関連から—

橋本みきえ，大西 良<sup>1</sup>

(西九州大学社会福祉学科，久留米大学大学院<sup>1</sup>)

(平成17年12月8日受理)

## How Students Could Change their Self-Evaluation and the Image for the Mental Disorder Persons in the Training of a Psychiatric Social Workers ? : In Relation to the Field Work

Mikie HASHIMOTO, Ryou OHNISHI<sup>1</sup>

( *Department of Social Work Science, Nishikyusyu University, Kurume University<sup>1</sup>* )

(Accepted December 8, 2005)

### Abstract

The most important thing is in training of mental health social work students to get a reasonable and positive evaluation. This reason is because that student who is able to get reasonable evaluation learns understand a patient justly.

We understood it by this investigation. Firstly, we understood that the stimulation to give good self-evaluation was necessary so that a student who good self-evaluation also got motivation.

Secondly we have understood that the student who received well needs assessment can change a mental patient image of themselves thereby into a more fair and positive image.

From this I understood that it was important for the teachers and leaders in mental health social work training to create an environment that can the pressure and nurture a good self-evaluation.

Key words: self-evaluation 自己評価

self-image 自己イメージ

field work フィールドワーク

## はじめに

精神保健福祉士が国家資格化されて以降、精神保健福祉士養成機関のあり方と実習を引き受ける現場の状況について検討が続けられている。現場サイドからは実習指導者の戸惑いや不安、実習プログラムのあり方、有効なスーパービジョンシステムなどについての問題点や課題などが報告されており、養成機関サイドからは教育カリキュラムのあり方や学生に対する動機づけ、実習教育に関する意見などが報告されている。しかし精神保健福祉実習の主役である学生の不安やストレス、自己イメージや精神障害者イメージの変化などに着目した研究は少ない。

柏木<sup>1)</sup>は精神保健福祉現場実習の一つに「ソーシャルワーカーの自己覚知に関する理解」をあげている。精神保健福祉士カリキュラム等検討会報告書[1998年10月]では、「現場体験を通して精神保健福祉士として必要な知識及び技術並びに関連知識の理解を深める」ことを、清水<sup>2)</sup>は「患者を理解する」ことを、荒田<sup>3)</sup>は「観察すること、面接すること、記録をとることの原則を習得する」ことをそれぞれ現場実習の目的の一つとしてあげている。しかし実際にはそういった目標を持ち、達成できるよう努力できるまでには小さな努力や成長の積み重ねが必要であると考えられる。なぜなら最近の学生について江口<sup>4)</sup>は「生活体験不足」を指摘し、他者とのかかわりにおいて自分自身に対する適正な価値を持っているかが重要な課題である。自己に対する適正な価値と精神保健福祉領域に対するモチベーションには関連性があるように思う。また精神保健福祉士を志す学生とはいえ、精神障害者と日常的に交流できる機会は制限されているため精神障害者に対するイメージは実習に影響を及ぼすことも考えられる。筆者らは第4回日本精神保健福祉士学会において精神保健福祉現場実習前後の学生の自己イメージの変化について報告した。挑戦ストレス（自己のモチベーションを正方向に転換するストレスのこと）認識した学生、すなわちプラスの評価を与えられた学生ほど自己イメージが肯定の方向へ変化したことを報告した。

そこで本研究ではこれらのことを踏まえ精神保健福祉現場実習と精神保健福祉士を志す学生の自己イメージや精神障害者イメージの関連性についてアンケートを実施し考察を加えることで精神保健福祉現場実習教育のとの連携を検討する。

## 1. 方法

### 1) 調査時期

2004年6月～2004年10月

### 2) 調査対象者

精神保健福祉士養成課程の大学生44名（男性9名、女性35名、平均年齢23.23歳）。年齢については、Table 1に示すとおり、平均年齢が23.23歳で20歳代が9割以上を占めている。また男女比はTable 2に示すとおり、女性35名（79.5%）、男性9名（20.5%）である

Table 1 対象者の年齢

年齢	度数	%
21	17	38.6
22	12	27.3
23	5	11.4
24	2	4.5
26	2	4.5
27	1	2.3
28	1	2.3
29	2	4.5
34	1	2.3
39	1	2.3
		n=44

Table 2 対象者の性別

	度数	%
男性	9	20.5
女性	35	79.5
		n=44

### 3) 調査尺度の説明

本研究では、学生の抱く自己へのイメージと精神障害者へのイメージを測定するものとして、Semantic Differential Method（以下SD法<sup>5)</sup>）を用いた。SD法は、Osgood, C.E (1952)<sup>6)</sup>が最初に理論構成を行ったもので、もともとは、言語の意味の測定法として開発されたものである。その後、ひとが色彩、音楽、絵画、商品、人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味あるいはそのイメージを測定する方法として利用されるようになった。本研究では井上ら (1985)<sup>7)</sup>が心理学や教育学の分野で用いパーソナリティの測定に有効であるとする形容詞対49項目の中から使用頻度の高い30項目の形容詞対を用いた。これらの形容詞対を用いて自分自身のイメージを評定し、回答欄には、「非常によくあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の4段階の評定尺度を設けた。評定尺度の配点は、「どちらともいえない」の0点を中心に置き-3～3点までの配点を行った。したがって、得点が正の数であれば右側のイメージが強調され、得点が負の数であれば左側のイ

Table 3 実習前での自己イメージの因子分析結果

質問項目	積極的	誠実さ	逞しさ	慎重さ	共通性
積極的な-消極的な	0.843	0.024	0.294	0.229	0.740
外向的な-内向的な	0.841	-0.011	0.290	-0.084	0.451
明るい-暗い	0.806	0.163	0.058	0.268	0.551
社交的-非社交的	0.792	0.176	0.028	-0.128	0.643
活発な-不活発な	0.769	0.040	0.382	0.029	0.599
おしゃべりな-無口な	0.711	-0.185	0.169	-0.175	0.426
たくましい-弱々しい	0.602	0.312	0.403	0.336	0.556
のんびりした-てきぱきした	-0.583	-0.378	0.146	0.120	0.705
派手な-地味な	0.489	-0.152	0.342	-0.207	0.799
自主的-依存的	0.446	0.192	0.244	0.233	0.518
親切的な-不親切的な	-0.094	0.796	0.024	0.019	0.565
家庭的な-非家庭的な	-0.007	0.738	-0.142	0.140	0.355
誠実な-不誠実な	0.336	0.659	-0.130	0.184	0.422
指導力のある-指導力のない	0.162	0.626	0.461	-0.132	0.585
真面目な-不真面目な	0.442	0.567	-0.336	0.276	0.715
頼もしい-頼りない	0.437	0.492	0.273	0.456	0.557
意志強固な-意志薄弱な	0.393	0.482	0.046	0.232	0.598
理性的-感情的	-0.097	0.470	0.435	0.177	0.509
おおらかな-気持ちの細やかな	0.201	-0.266	0.674	0.006	0.648
強い-弱い	0.291	0.111	0.667	0.117	0.736
楽観的な-悲観的な	0.347	0.055	0.619	0.049	0.301
繊細な-大まかな	-0.107	0.174	-0.538	0.307	0.443
決断力のある-決断力のない	0.410	0.254	0.504	0.252	0.676
優雅な-粗野な	0.036	0.113	-0.034	0.791	0.350
視野の広い-視野の狭い	0.165	0.174	0.469	0.697	0.546
慎重な-軽率な	0.055	0.116	-0.442	0.578	0.711
魅力のある-魅力のない	0.544	0.012	0.343	0.545	0.763
温かい-冷たい	0.069	0.203	0.094	0.496	0.751
野心のある-野心がない	0.258	0.194	0.094	-0.492	0.850
細やかな-雑な	-0.182	0.409	-0.355	0.481	0.640
寄与率 (%)	21.631	12.995	12.808	11.593	
累積寄与率 (%)	21.631	34.626	47.434	59.027	
$\alpha$ 係数	0.843	0.812	0.762	0.758	

Table 4 実習後での自己イメージの因子分析結果

質問項目	誠実さ	社交的	許容的	活発さ	共通性
誠実な-不誠実な	0.835	0.162	0.224	0.076	0.588
意志強固な-意志薄弱な	0.762	0.009	0.252	-0.028	0.538
家庭的な-非家庭的な	0.724	0.369	-0.231	-0.201	0.546
慎重な-軽率な	0.661	-0.224	-0.236	0.266	0.358
優雅な-粗野な	0.651	0.062	0.003	-0.212	0.703
温かい-冷たい	0.651	0.190	0.278	0.282	0.616
繊細な-大まかな	0.623	-0.337	-0.336	0.042	0.586
頼もしい-頼りない	0.590	0.517	0.287	-0.191	0.565
魅力のある-魅力のない	0.560	0.396	0.201	0.248	0.469
細やかな-雑な	0.547	-0.008	-0.473	0.006	0.450
派手な-地味な	-0.540	0.532	0.085	0.222	0.700
真面目な-不真面目な	0.459	0.375	-0.433	0.163	0.610
社交的-非社交的	0.017	0.836	0.107	0.291	0.631
指導力のある-指導力のない	0.378	0.750	0.190	0.070	0.754
おしゃべりな-無口な	-0.295	0.690	-0.217	0.304	0.734
強い-弱い	-0.020	0.593	0.390	-0.285	0.523
外向的な-内向的な	0.156	0.537	0.247	0.307	0.780
活発な-不活発な	0.113	0.537	0.420	0.332	0.603
親切な-不親切な	0.241	0.482	-0.063	0.253	0.747
おおらかな-気持ちの細やかな	0.036	-0.047	0.834	0.034	0.622
楽観的な-悲観的な	0.073	0.312	0.705	0.061	0.617
視野の広い-視野の狭い	0.010	0.065	0.614	0.521	0.646
決断力のある-決断力のない	-0.127	0.406	0.551	0.247	0.794
自主的-依存的	0.146	0.497	0.505	0.061	0.528
たくましい-弱々しい	0.387	0.447	0.494	0.169	0.614
野心のある-野心がない	-0.005	0.185	0.251	0.716	0.572
積極的な-消極的な	0.168	0.347	0.461	0.705	0.653
のんびりした-てきぱきした	-0.010	-0.076	-0.050	-0.665	0.750
理性的-感情的	0.035	-0.139	0.321	-0.644	0.859
明るい-暗い	-0.106	0.557	0.182	0.629	0.473
寄与率 (%)	18.334	17.724	14.097	11.941	
累積寄与率 (%)	18.334	36.058	50.155	62.096	
$\alpha$ 係数	0.883	0.835	0.808	0.729	

Table 5 実習前での精神障害者イメージの因子分析結果

質問項目	真面目さ	活動的	穏やかさ	過敏さ	共通性
思いやりのある-わがままな	0.782	0.021	-0.173	0.038	0.490
親切的な-不親切的な	0.74	0.259	0.276	0.083	0.495
真面目な-不真面目な	0.68	0.093	0.098	-0.303	0.556
優しい-怖い	0.627	0.24	0.125	0.065	0.454
慎重な-軽率な	0.624	0.087	0.227	0.329	0.623
かわいらしい-憎らしい	0.575	0.164	0.189	0.056	0.410
おしゃべりな-無口な	-0.564	0.386	0.07	-0.138	0.573
落ち着いた-落ち着きのない	0.551	-0.102	0.497	-0.219	0.470
清潔な-不潔な	0.512	0.248	0.393	0.019	0.484
責任感のある-無責任な	0.506	0.203	0.084	-0.445	0.221
親しみやすい-親しみにくい	0.458	0.439	0.261	-0.223	0.799
温かい-冷たい	0.452	0.33	0.421	0.068	0.545
理性的な-感情的な	-0.411	-0.013	0.013	0.229	0.479
意欲的な-無気力な	0.142	0.859	0.197	-0.038	0.740
元気な-疲れた	0.063	0.816	-0.034	0.262	0.588
活発な-不活発な	-0.023	0.766	0.181	0.048	0.557
積極的な-消極的な	0.154	0.662	0.171	-0.254	0.678
勇敢な-臆病な	0.196	0.635	-0.067	-0.194	0.451
明るい-暗い	0.432	0.503	-0.181	0.134	0.663
陽気な-陰気な	0.382	0.459	0.308	0.049	0.502
のんびりした-せかせかした	0.023	-0.06	0.732	0.138	0.643
社交的な-非社交的な	-0.04	0.358	0.713	-0.201	0.520
柔和な-頑固そうな	0.28	0.074	0.571	0.014	0.610
穏やか-激しい	0.417	0.099	0.517	0.016	0.492
外向的な-内向的な	-0.207	0.4	0.483	-0.33	0.397
敏感な-鈍感な	-0.007	-0.155	0.239	0.712	0.559
素直な-気難しい	0.112	0.239	-0.35	0.686	0.698
寄与率 (%)	19.208	16.365	11.714	7.145	
累積寄与率 (%)	19.208	35.573	47.288	54.433	
$\alpha$ 係数	0.812	0.801	0.733	0.729	

Table 6 実習後での精神障害者イメージの因子分析結果

	非活動的	親和的	気難しさ	消極的	共通性
意欲的な-無気力な	0.813	-0.055	-0.241	-0.045	0.501
活発な-不活発な	0.800	0.160	-0.168	0.257	0.640
明るい-暗い	0.765	0.154	0.124	0.124	0.658
社交的な-非社交的な	0.764	0.053	0.186	-0.296	0.544
外向的な-内向的な	0.715	-0.333	-0.102	0.050	0.608
陽気な-陰気な	0.697	0.127	0.152	0.288	0.759
清潔な-不潔な	0.613	0.093	0.018	-0.105	0.287
元気な-疲れた	0.552	0.129	-0.517	0.371	0.543
責任感のある-無責任な	0.549	-0.329	0.496	-0.099	0.630
勇敢な-臆病な	0.516	0.057	-0.249	-0.168	0.360
温かい-冷たい	-0.005	0.780	0.150	0.165	0.461
親しみやすい-親しみにくい	0.002	0.770	-0.169	-0.134	0.724
穏やか-激しい	-0.059	0.678	-0.142	-0.435	0.636
真面目な-不真面目な	0.208	0.599	0.361	0.103	0.395
かわいらしい-憎らしい	-0.048	0.567	0.150	0.161	0.726
親切な-不親切な	0.219	0.535	0.096	0.039	0.328
優しい-怖い	0.406	0.525	0.416	0.128	0.258
柔和な-頑固そうな	0.124	0.502	0.009	0.138	0.708
のんびりした-せかせかした	-0.123	0.413	0.121	-0.019	0.672
思いやりのある-わがままな	0.000	0.077	0.698	-0.103	0.511
素直な-気難しい	-0.096	0.323	0.627	0.066	0.665
敏感な-鈍感な	-0.005	0.129	0.551	0.087	0.503
理性的な-感情的な	0.272	0.349	-0.455	-0.242	0.640
おしゃべりな-無口な	0.000	0.012	-0.059	0.744	0.572
優雅な-粗野な	-0.191	0.112	0.250	0.623	0.556
積極的な-消極的な	0.468	0.297	-0.045	0.485	0.372
落ち着いた-落ち着きのない	0.011	0.333	0.477	-0.484	0.201
慎重な-軽率な	0.181	0.299	-0.032	0.367	0.345
寄与率 (%)	19.204	14.982	10.189	8.493	
累積寄与率 (%)	19.204	34.186	44.375	52.868	
$\alpha$ 係数	0.821	0.800	0.746	0.703	

メージが強調されることになる。

#### 4) 手続き

調査票は、実習前後ともに講義中に配布、回収を行った。学生の実習時期に応じて随時、調査を実施した。

#### 5) 統計的解析

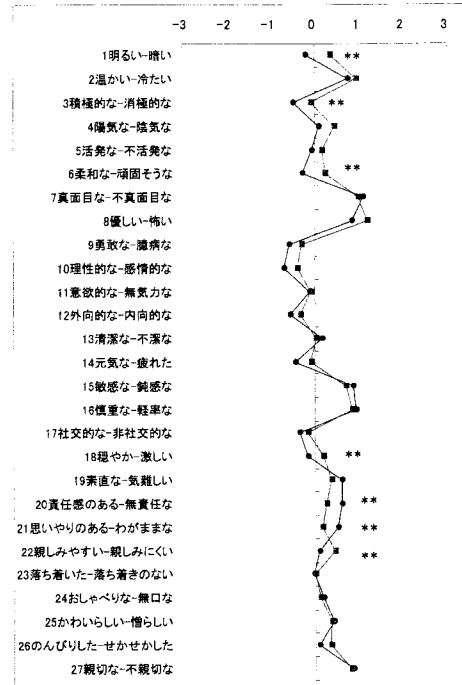
まず、イメージ質問項目の実習前後での変化を明らかにするために、対応のあるt検定を施した。つぎに、自己イメージ尺度と精神障害者イメージ尺度の因子構造を検討するために、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、因子を抽出した。さらに、抽出された自己イメージの各因子、また、精神障害者イメージの各因子の実習前後での関連性を明らかにするために、実習前の各因子を一元に配置する分散分析を行った。そして、自己イメージ因子と精神障害者イメージ因子の関連性を明らかにするために、分散分析を行った。

## 2. 結 果

### 1) 実習前後での自己、精神障害者イメージの変化

まず、自己イメージの実習前後での変化について、各項目で対応のあるサンプルのt検定を行ったところ Figure 1 のような結果が得られた。実習前後で有意に変化した項目は、「強い-弱い」のみで、実習を経験することで自分は弱い存在であるとイメージを抱いていることが分かった。

次に、精神障害者イメージにおいても同様の検定を行ったところ Figure 2 のような結果が得られた。実習前後で有意に変化した項目は、「明るい-暗い」「積極的な-消極的な」「柔和な-頑固な」「穏やかな-激しい」「責任感のある-無責任な」「思いやりのある-わがままな」「親しみやすい-親しみにくい」の6項目であった。全体的にグラフの右よりで推移している。つまり、比較的否定的なイメージを抱いていることが特徴といえる。<sup>8,9)</sup>



●：実習前 ■：実習後 \*\*：p<0.01 \*：p<0.05

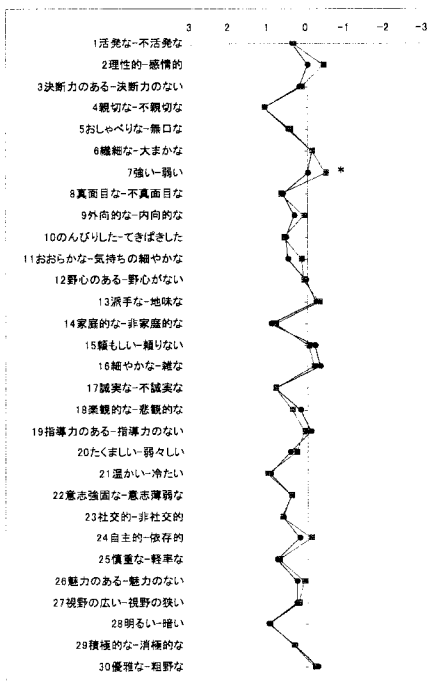
Figure 2 精神障害者イメージの実習前後での変化

### 2) 自己イメージの因子分析結果

実習前後における自己イメージ項目について、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から実習前後で各4因子解を適当と判断し、これを採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数（ $\alpha$ 係数）を求めたところ、実習前で $\alpha = 0.843 \sim 0.758$ 、実習後で $\alpha = 0.883 \sim 0.729$ と高い信頼性が確認された。さらに、実習前の4因子の累積寄与率は59.027%、実習後の4因子の累積寄与率は62.096%であった。

実習前の各因子の内訳は、第1因子10項目（ $\alpha = 0.843$ ）、第2因子8項目（ $\alpha = 0.812$ ）、第3因子5項目（ $\alpha = 0.762$ ）、第4因子7項目（ $\alpha = 0.758$ ）である。その内容を Table 3 に示す。

実習前の因子分析の結果、抽出された4因子30項目について各因子の内容を以下に示す。第1因子は、因子負荷量の高い順に「積極的な-消極的な」「外向的な-内容的な」「明るい-暗い」「社交的な-非社交的な」



●：実習前 ■：実習後 \*\*：p<0.01 \*：p<0.05

Figure 1 自己イメージの実習前後での変化

「活発な－不活発な」などの10項目からなり、それを「積極的」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「親切的な－不親切的な」「家庭的な－非家庭的な」「誠実な－不誠実な」「指導力のある－指導力のない」「真面目な－不真面目な」などの8項目からなり、それを「誠実さ」因子と命名した。第3因子は、因子負荷量の高い順に「おおらかな－気持ちの細やかな」「強い－弱い」「楽観的な－悲観的な」「繊細な－大まかな」「決断力のある－決断力のない」の5項目からなり、それを「逞しさ」因子と命名した。第4因子は、因子負荷量の高い順に「優雅な－粗野な」「視野の広い－視野の狭い」「慎重な－軽率な」「魅力のある－魅力のない」「温かい－冷たい」などの7項目からなり、「慎重さ」因子と命名した。

次に実習後の各因子の内訳は、第1因子12項目 ( $\alpha = 0.883$ )、第2因子7項目 ( $\alpha = 0.835$ )、第3因子6項目 ( $\alpha = 0.808$ )、第4因子5項目 ( $\alpha = 0.729$ )である。その内容を Table 4 に示す。

実習後の因子分析の結果、抽出された4因子30項目について各因子の内容を以下に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に「誠実な－不誠実な」「意思強固な－意志薄弱な」「家庭的な－非家庭的な」「慎重な－軽率な」「優雅な－粗野な」などの12項目からなり、「誠実さ」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「指導力のある－指導力のない」「おしゃべりな－無口な」「強い－弱い」「外向的な－内容的な」「社交的な－非社交的な」などの7項目からなり、「社交的」因子と命名した。第3因子は「おおらかな－気持ちの細やかな」「楽観的な－悲観的な」「視野の広い－視野の狭い」「決断力のある－決断力のない」「自主的な－依存的な」などの6項目からなり、「許容的」因子と命名した。第4因子は「野心のある－野心のない」「積極的な－消極的な」「のんびりした－てきぱきした」「理性的な－感情的な」「明るい－暗い」の5項目からなり、「活発さ」因子と命名した。<sup>9)10)</sup>

### 3) 精神障害者イメージの因子分析結果

実習前後における精神障害者イメージ項目について、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から実習前後で各4因子解を適当と判断し、これを採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数( $\alpha$ 係数)を求めたところ、実習前で $\alpha = 0.812 \sim 0.729$ 、実習後で $\alpha = 0.821 \sim 0.703$ と高い信頼性が確認された。さらに、実習前の4因子の累積寄与率は54.433%、実習後の4因子の累積寄与率は52.868%であった。

実習前の各因子の内訳は、第1因子13項目 ( $\alpha =$

0.812)、第2因子7項目 ( $\alpha = 0.808$ )、第3因子5項目 ( $\alpha = 0.733$ )、第4因子2項目 ( $\alpha = 0.729$ )である。その内容を Table 5 に示す。

実習前の因子分析の結果、抽出された4因子27項目について各因子の内容を以下に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に「思いやりのある－わがままな」「親切的な－不親切的な」「真面目な－不真面目な」「優しい－怖い」「慎重な－軽率な」などの13項目からなり、「真面目さ」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「意欲的な－無気力な」「元気な－疲れた」「活発な－不活発な」「積極的な－消極的な」「勇敢な－臆病な」などの7項目からなり、「活動的」因子と命名した。第3因子は、因子負荷量の高い順に「のんびりした－せかせかした」「社交的な－非社交的な」「柔らかな－頑固そうな」「穏やかな－激しい」「外向的な－内容的な」の5項目からなり、「穏やかさ」因子と命名した。第4因子は、因子負荷量の高い順に「敏感な－鈍感な」「素直な－気難しい」の2項目からなり、「過敏さ」因子と命名した。

次に実習後の各因子の内訳は、第1因子13項目 ( $\alpha = 0.812$ )、第2因子7項目 ( $\alpha = 0.808$ )、第3因子5項目 ( $\alpha = 0.733$ )、第4因子2項目 ( $\alpha = 0.729$ )である。その内容を Table 6 に示す。

実習前の因子分析の結果、抽出された4因子27項目について各因子の内容を以下に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に「意欲的な－無気力な」「活発な－不活発な」「明るい－暗い」「社交的な－非社交的な」「外向的な－内容的な」などの10項目からなり、「非活動的」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「温かい－冷たい」「親しみやすい－親しみにくい」「穏やかな－激しい」「真面目な－不真面目な」「かわいらしい－憎らしい」などの9項目からなり、「親和的」因子と命名した。第3因子は、因子負荷量の高い順に「思いやりのある－わがままな」「素直な－気難しい」「敏感な－鈍感な」「理性的な－感情的な」の4項目からなり、「気難しさ」因子と命名した。第4因子は、因子負荷量の高い順に「おしゃべりな－無口な」「優雅な－粗野な」「積極的な－消極的な」「落ち着いた－落ち着きのない」「慎重な－軽率な」の5項目からなり、「消極的」因子と命名した。

### 4) 性差によるイメージの違いについて

性別によって自己イメージと精神障害者イメージにどのような違いがあるのかを明らかにするために、性別を要因とする一要因の分散分析を行った。その結果、自己イメージでのみ有意な差がみられた。また自己イメージの因子ごとの実習前後での差の検定では、 $\chi^2$ 二乗検定に



よって差を明らかにした結果、実習前では「積極的」因子で、実習後では「許容的」因子で有意に男女に差がみられた。Figure 3、 Figure 4 にそれを示した。

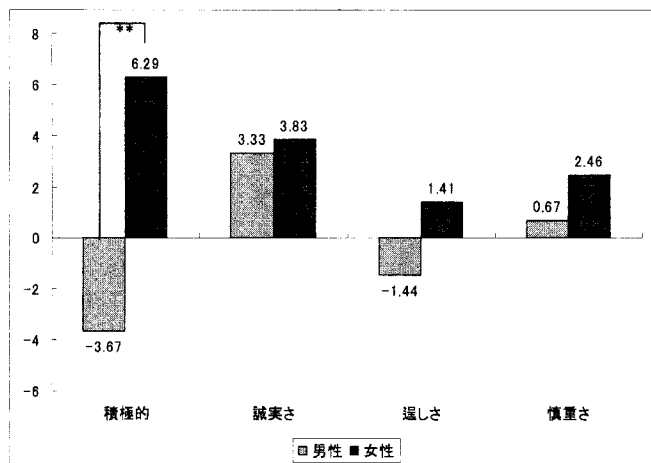


Figure 3 実習前での自己イメージの性差

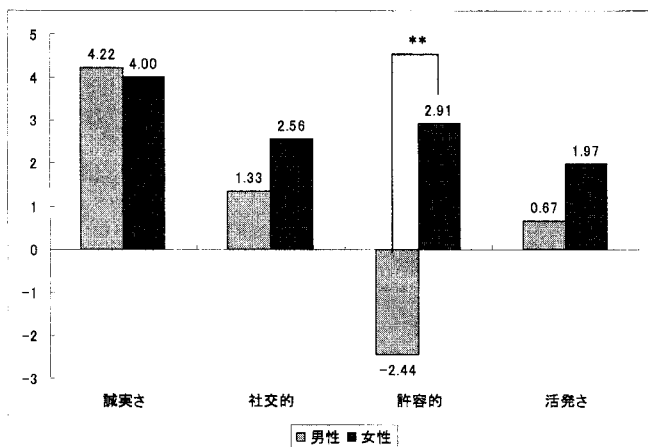


Figure 4 実習後での自己イメージの性差

5) 自己イメージと精神障害者イメージの関連性について  
 まず、自己イメージ各因子の実習前後での関連性を明らかにするために、実習前の各因子それぞれを独立変数とし、実習後の4因子を従属変数とする一要因の分散分析を行った結果、次のようなことが明らかとなった。実習前の「積極的」因子は実習後の「社交的」「許容的」因子と関係がみられた。また実習前の「誠実さ」「慎重さ」因子は実習後の「誠実さ」因子と関係があり、実習前の「逞しさ」因子は実習後の「許容的」因子と関係が見られた (Figure 5)。

次に、精神障害者イメージの実習前後での関連性については、「穏やかさ」因子が実習後の「気難しさ」因子と関連がみられた (Figure 6)。

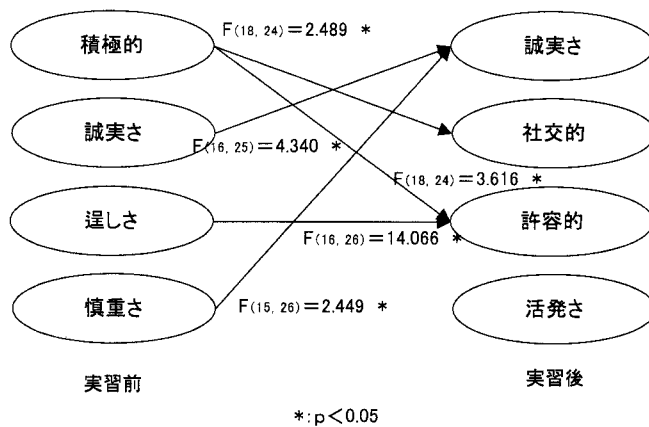


Figure 5 自己イメージ因子の実習前後での関連性

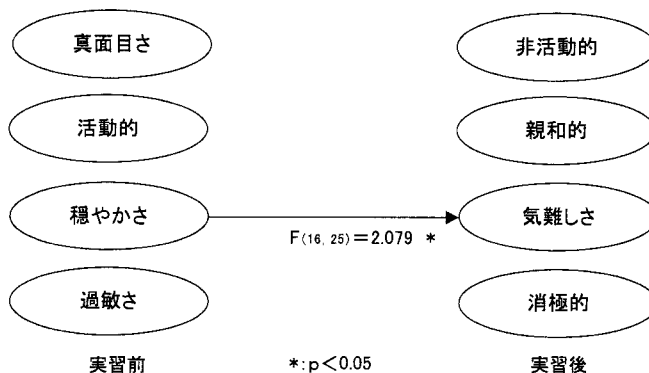


Figure 6 精神障害者イメージの実習前後での関連性

さらに、実習後での自己イメージと精神障害者イメージとの関連性を見てみると、自己イメージの「許容的」因子と「親和的」因子の間に有意な関連性が見られ、この2因子の平均値の散らばりを Figure 7 に示す。この2因子の変化を Pearson 相関分析を行ったところ、正の相関があることが明らかとなった。<sup>11) 12) 13) 14)</sup>

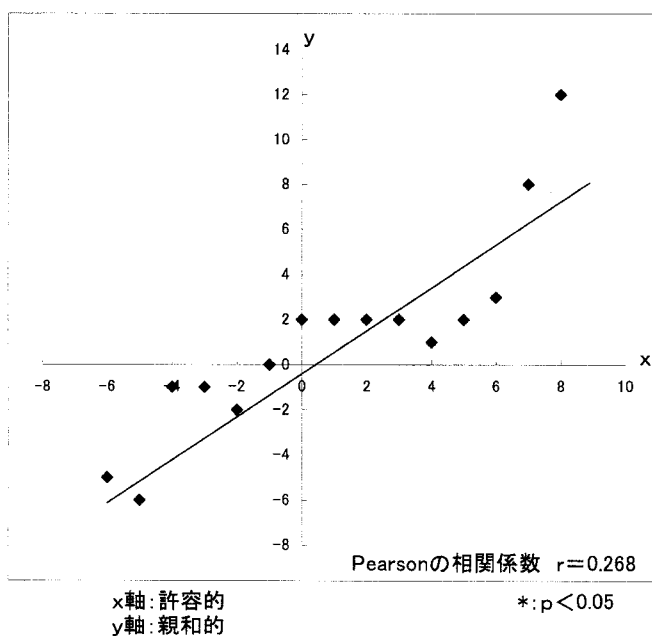


Figure 7 2 要因の相関

## 考 察

### 1) 自己イメージについて

精神保健福祉現場実習を履修する学生の自己イメージは実習前には「積極的」「誠実さ」「たくましさ」「慎重さ」の4因子が抽出された。精神保健福祉現場実習に望む学生には、誠実で積極的な態度が求められ、さらに4週間から6週間という長期にわたる実習であるため心身ともに一定程度の強さが必要である。

同時に指導者、実習機関の中での人間関係作りにおいて、言葉使い、行動、情報共有などについてより慎重な態度で望まなければならない。本調査で得られた4因子はいずれも一般に精神保健福祉現場実習において学生に求められる資質をあらわしたものと見える。学生自身が現場から求められる実習生像を意識できていることがわかる。これは調査対象者が大学3年次に社会福祉現場実習を履修し種々の社会福祉施設や福祉事務所などで2週間から4週間の現場実習を体験していることから、実習に求められる学生の資質を理解していると考えられる。学生のうち年齢の高い者については一定程度の社会経験を有していると思われ、その経験が自己イメージの形成に影響していると考えられる。実習後の自己イメージでは「誠実さ」「社交的」「許容的」「活発さ」の4因子が抽出された。

精神保健福祉現場実習の経験が模擬精神保健福祉士としてのみならず模擬社会人としての姿勢を要求し、それに応えようとしたことによって「社交的」「許容的」といった因子と変化したのではなかろうか。実習前の「積極性」因子と実習後の「社交性」「許容的」因子と関連性が見られることで明らかとなる。

### 2) 精神障害者イメージについて

前述したように精神保健福祉士を志す学生であっても日常に精神障害者と交流する機会には限界があり、精神障害者に対するイメージは自分が知りえる特定の障害者をイメージするか、教科書や講義で知りえた情報の中からイメージを作ることになるのではなかろうか。今回の調査では実習前の精神障害者のイメージは「真面目さ」「活動的」「穏やかさ」「過敏さ」の4因子が抽出された。実習後の調査ではこれら精神障害者の対するイメージは「非活動的」「親和的」「気難しさ」「消極的」因子へと変化している。

これは精神保健福祉現場実習において学生がより多くの精神障害者と出会い、交流しまたは精神保健福祉士の援助過程に同席することによって得られたイメージであり、実習前の知識の中で作られたイメージから等身大の素直なイメージに変化したといえる。「穏やかさ」イメージと「気難しさ」イメージに関連性がみられるとの結果

から、学生が自らの体験の中から得たイメージであることが伺える。

### 3) 自己イメージと精神障害者イメージの関連性

解析結果でも述べたように「許容的」な自己認識と、精神障害者に対する「親和的」なイメージには関連性が認められた。前述のように精神保健福祉現場実習前後の学生の自己イメージは挑戦ストレスを認識した学生、すなわちプラスの評価を与えられた学生ほど肯定の方向へ変化した。学生のさまざまな体験を通して得られる自己イメージの肯定的イメージは相手に対する警戒や不安の程度を低くし、「受容」する態度を形成する。「許容的」なイメージは実習生としての肯定的イメージとしてのみならず、援助者としてのイメージの形成にも影響する。自己イメージが肯定の方向へ変化するほど精神障害者イメージが肯定と等身大の方向へと変化的ことから、学生の実習を通じた体験が精神障害者イメージの形成にも影響することが伺える。

なお、今回の調査では調査対象者の年齢構成と男女比にひらきがあったが、これらの差が今回の調査にどのような影響を与えたかについて検討することは行わなかったため、今後の課題としたい。

## ま と め

精神保健福祉士を目指す学生の現場での体験には、現場を見聞することでうける刺激、精神障害者から受ける正負の刺激、実習指導者から受ける正負の指導、指摘がある。

その中で学生は自己を評価し、他者を理解することを体得していく。肯定的な方向へそれらが変化していくためには、実習現場において挑戦ストレスすなわちプラスの評価を受けることが他者理解に影響すると推測される。さらに自己イメージが「許容的」であった学生は精神障害者に対して「親和的」イメージを抱いていることが立証されたことから、学生自身が精神的にゆとりを持つことによって内省が促進され、他者理解が進むと推測される。そのため学生が自己イメージを向上させることができるような教育現場での事前指導や個別支援、実習プログラムや現場での指導といった環境を提供できるような準備がなされることが望ましいといえる。<sup>15)</sup>

注) この研究は永原学園特色ある研究助成金により実施している。

## 参考文献

- 1) 柏木 昭 「精神保健福祉士養成セミナー 精神保健福祉援助実習」第1章Ⅲ  
2001年 へるす出版

- 2) 清水通生 「社会福祉実習」第4章9 平成3年 中央法規
- 3) 荒田 寛 —「精神保健福祉援助実習」への期待と今後の課題— 「精神保健福祉」V o l 32 N o 1. 45号
- 4) 江口 賀子 「社会福祉系養成校における学生の生活体験調査」 九州社会福祉研究 第30号 2005年
- 5) 岩下 豊彦 「SD法によるイメージの測定、その理解と実施の手引き」 1983年 川島書店
- 6) Osgood,C,E and et al:The Measurement of Meaning Univ. of Illinois, sPress.Urbana, 1957
- 7) 井上正明・小林利宣 「評価技法としてのSD法の意義とその使い方(その2) —形容詞対の尺度構成の方法—」 指導と評価 31(10) 1985年
- 8) 南 彩子ら 社会福祉援助技術現場実習における総合的評価をめざして～学生・現場指導者・教員の三者による評価を通して～ p 89-p 100 社会福祉実践理論研究 第9号 2000年
- 9) 山井 理恵 社会福祉現場実習における学生の自己評価～学習成果に関連する要因～ p 55-p 68 社会福祉実践理論研究 第8号 1999年
- 10) 大沢 いずみ 社会福祉援助技術演習におけるグループ体験と評価の実施～実施方法の構造化へ向けて～ p 1-p 12 社会福祉実践理論研究 第10号 2001年
- 11) PaganaKD.Psychometric Evaluation of the Clinical Stress Questionnaire. Journal of Nursing Education 28 169-174 1989
- 12) olkman,S.&Lazarus,R.S. If it changes it must be a process Study of emotion and coping during three stages of a college examination. Journal of Personality and Social Psychology. 48 151-170 1985
- 13) 大西 良ら 「精神医学」受講における学生の精神障害者イメージの変化 p 37-p 46 久留米大学文学部紀要社会福祉学科編 第5号 2005年
- 14) 岩永 直美ら 精神保健福祉士の新人教育の現状と大学の役割～久留米大学文学部社会福祉学科 PSW コース卒業生へのアンケート調査結果より～ p 69-p 78 久留米大学文学部紀要社会福祉学科編 第5号 2005年
- 15) 橋本 みきえ 精神保健福祉士養成のための精神保健福祉援助実習の現状と今後の課題 九州社会福祉研究 第27号 2002年